

解題 モダニズム／モダニティの時空間 「トランスアトランティック・モダニズム」の展望

中井重佐子

一 はじめに——学際性と専門化

「学際性」などという術語が人口に膾炙する一方で、近年の大学における学問研究はますます専門化、個別化の傾向にあるようにも見える。無論、私の専門分野である英文学研究も例外ではない。かつて一つのディシプリンであった「英文学」は、まず国民国家の境界線に沿って厳格に分断され、次に時代ごとに区切られ、近年では理論、メディア、方法論ごとにも専門が細分されるようになった。英米の大学には現在、「映画研究」、「エスニシティ研究」、「ポストコロニアル研究」といった看板を掲げる「学際的」な学部、学科が数多く存在する。こうした学部で教える教員の多くはいまだ、九〇年代半ば以前の英文科や（ヨーロッパ文学・思想を専門とする）比較文学科に学んだ研究者だが、その教え子たちはもはや「文学」を自らの研究の立脚点とはしない。「映画研究」を専門とする学生が『失われた時を求めて』を読んていなくてもたぶん困りはしないし、「エスニシティ研究」でアジア系アメリカ文化を学ぶ学生であれば、ヴァージニア・ウルフが誰だか知らなくてもかまわない。

大学設置基準大綱化による教養課程改組とともに一九九六年に設立された一橋大学言語社会研究科が、英米の大学の新設学科と似た状況にあることは確かである。言うまでもなく、私は「死にゆく学問」への郷愁をむやみに煽るつもりはなく、学問領域の再編自体を批判したいわけでもない。私自身の研究にとっても、「英文学」が「ポストコロニアル研究」になったおかげで、歴史学、政治学、文化人類学といった領域との連携が容易になった。そうした学際的な研究交流によって得られたものは非常に多い。しかし、実際に「ポストコロニアル研究」を銘打った国際学会へ出かけていくと——言社研にいても、どのみち同じことかもしれないが——そこには共通のディシプリン、あるいはそうしたディシプリンに基づいた共通言語が存在せず、個々の研究者はモノローグ的に自らの研究を語るのみ、といったこともしばしば起こる。はたして、次の世代、「英文学」や

「フランス文学」ではなく「ポストコロナリアル研究」を学んだ世代の研究者が大学や学会で主流派となる時代になれば、新たなディシプリン、新たな共通言語が確立されているのだろうか（そのときまで、英米の大学にせよ日本の大学にせよ、人文系の学問領域は生き永らえているだろうか）。

言社研の英語系教員をコア・メンバーとする本研究プロジェクト「トランスアトランティック・モダニズム」は、モダニズム研究の視野を広げ、国境や個別の方法論を超えた研究交流を活性化することを当面の目的としてスタートした。昨今の学問情勢にあつては、こうしたプロジェクトはやや中途半端な、見ようによってはまだまだ守旧的な企画であるかもしれない。モダニズム研究は伝統的に英米文学研究の主流分野の一つであり、プロジェクトの担い手はアメリカ文学研究者、イギリス文学研究者として自己形成してきた世代の研究者である。しかし、本プロジェクトに携わる個々の研究者は、各々が国（地域）別作家別、方法論別にさらに高度に専門化された研究に携わりつつも、それぞれのやり方で、伝統的な英米文学研究の枠を超える新領域を開拓すべく努力してきたはずである。今私たちに必要なのは、まず私たち自身が研究成果を互いに開示し、意見を交換し、それぞれが培ってきた専門知識の蓄積の厚みを尊重しつつも積極的に互いの分野に介入していくこと、専門性に固執せずそうした介入を互いに許容することではないか（ちなみに——余計な注釈だが——議論というのは、日本の学界でよくあるような「果し合い」をすることもなければ、声の大きな者の意見に他の者が従うことでもなく、異なるポジションにある者が言葉を交わすことによつて僅かずつでも歩み寄り、譲歩し、共有できる地点を探ることだと私は思っている）。そうした議論の積み重ねなくては、次世代の研究者が継承するに足る「新しい」学問領域を開拓することはできないだろう。「新しいもの」は、過去や現在との全き断絶から突如として出現するのではなく、過去や現在との葛藤から生み出される——そうした思考様式そのものが、モダニズムの呪縛だったとしても。

本プロジェクトの活動の一環として、本年度は国内外の気鋭の研究者を講師に招き、三回の講演会を開催した（二〇〇九年一月現在）。これらの講演会はいずれも、言語社会研究科二〇〇九年度研究プロジェクト費の助成を受けている（ただし、アル・カーシム氏の講演は、鶴飼哲氏主催の国際交流セミナーとの共催である）。本特集に収録された論文はこれらの講演を元に執筆された。各論文の具体的な紹介は当日のコメンテータによる解題に任せることとし、本稿では以下の紙幅で、近年の

英語圏モダニズム研究の抱える——本特集の三つの論文にも暗黙のうちに共有されているであろう——二つの問いを提起したい。以下の文章自体、研究分野を異にする言社研の同僚や院生の多くにとっては専門的で理解しがたいのではないかと危惧しつつ、しかし可能な限り私たちの専門を次世代の研究者に開いていこうと試みているつもりである。

二 グローバル・モダニズム？

モダニズム研究の言語論的転回と歴史学的転回の後に来るのは、空間論的転回なのだろうか (Brooker and Thacker 1-5)。確かに今日、ポストコロニアル研究、グローバリゼーション研究等の成果を踏まえた後に、国境の外を省みないモダニティ研究、モダニズム研究など想像しがたい。植民地支配がアフリカの伝統工芸を「発見」していなければヨーロッパの前衛芸術は誕生しなかっただろうし、アメリカ資本の旺盛な購買力がなかったら、マチスもピカソも、少なくとも私たちが今知るような偉大な芸術家としては存在していなかったはずである。あるいはまた、W・E・B・デュボイス、C・L・R・ジェイムズのようなコスモポリタンなアフリカ系思想家をブラック・アトランティックという空間的視野なしに論じることとはできないし、「植民者の言語」で書かれたアフリカ文学、カリブ文学という卓越した世界文学のジャンルが生まれることもなかっただろう。だが、フランスアトランティックという概念はそうした目に見える文化現象だけでなく、近代そのものの形成に直接関わっている。アフリカから強制移住させられた奴隷の労働力こそが近代的な経済システムを作り出したのであり、同時に、そもそも西洋近代思想を支える鍵概念である「自由」自体が、フランスアトランティックな奴隷制が生んだ決定的な「隷属状態」の対立概念として成立したのだ。フランスアトランティックとは、近代が植民地化、脱植民地化、ネオ・コロンニアリズムそしてグローバル化といった政治・経済的背景の下に空間的拡張を果たした歴史的経緯を包括的に表す用語である。

モダニズム空間の拡大は、必然的にいくつかの問題を生む。西欧及び北米をモデルとして構築されてきた「近代」の理念型は、他地域に対しても一律に適用されるべきだろうか。アルジュン・アパデュライは著書『さまよえる近代』（一九九六年）の中で、「近代化理論 (modernization theory)」——いかなる社会も単一の近代化の歴史を辿るとする啓蒙主義的発想——を

批判し、近代とグローバル化のダイナミックな関係を「グローバル・カルチュラル・フロー」という観点から捉え直した。ローカル（地域的）なものをはじめ、グローバル化への抵抗として再生産される。あるいはまた、近代はそれぞれの地域と場所において、欧米先進国とは異なる形で経験される——先進国では年代的、内容的にポストモダンと見なされる消費文化、マス・カルチャー的現象も、他所では「近代」として、場合によっては「今、ここ」ではない「どこか別の場所」として経験される。

とすれば、近代とは常に複数形で思考されるべきだろうか。学術誌『モダニズム／モダニティ』に発表された論文「モダニズムを区分する——ポストコロニアルな近代とモダニズム研究の空間／時間の境界線」（二〇〇五年）の中で、スーザン・スタンプフォード・フリードマンは以下のように主張する。モダニズムは特定の地域、時代区分に限定される文化現象ではなく、いかなる地域、時代においても、それが異文化とのコンタクト・ゾーンであるならば、さまざまな形で近代（modernities）が出現し、そこにはさまざまなモダニズム（modernisms）が存在しうる。植民地支配はコンタクト・ゾーンの一つのあり方であり、それゆえ植民地独立前後に書かれたアフリカ文学をモダニズム文学とみなすのは妥当である。だが、こうしたフリードマンの主張は結局のところ、コスモポリタンでハイブリッドな西洋モダニズムの原型をアフリカ文学に当てはめて、六〇年代アフリカを「遅れてきた近代」と見なす西洋中心主義にすぎないと批判することもできる。そこにはさまざまなモダニズムがあるのではない、存在するのはあくまで、単数形のモダニズムのローカルで時代錯誤的な派生形なのではないか。「近代」の地域間におけるタイム・ラグの問題は、理論的にどう処理されるべきか。

ここでふたたび、ポストコロニアル리즘の眼識に頼ることは許されるだろうか。「ポストコロニアル리즘からグローバリゼーションへ」という発展史学が批評理論業界を席卷する昨今（Loomba et al）、ガヤトリ・スピヴァクが近年、しばしば両者の違いについて述べていることは、注目に値する。二〇〇七年の日本の日本の講演の中で「少なくともその土地の固有の語法に対する初歩的な理解がなくては、ポストコロニアルな状況に関わることはできません」と彼女は語っている。一方、グローバリズムとは「固有の語法を無視できる均一化作用」である（一三一—一三二頁）。スピヴァクはここで、グローバリゼーション研究に必ずしも否定的なのではない。アルメニア語を知らなくとも、世界経済システムの中に確固として存在するアルメニア

という一地域の問題に関わることは十分可能である。真に民主的な権利がすべての地球住民に保証されるような「よいグローバルイズム」を想定することによって、今ある(悪い)グローバルイズムに対処することもできるとスピヴァクは言う。英語という脱領域化されたメタ言語は、世界システムを公正に記述することを可能とする透明な主体のポジションを保証するかに見える。そこでは「近代」は常に大文字で、単数形である。だが、英米文学、英語文学の世界市場の彼岸に西洋化、悪しきグローバル化と必ずしも結びつかない近代を想像し続けることは、おそらく私たちにとっても忘却し得ない倫理的要請である。非英語圏に居住しながら「英文学研究(English Studies)」という名のグローバルな文化産業の一端を担う私たちの研究が、たんなるシステムの記述と現状追認に終始するのではない、批判的介入たりえるためには。

三 理論とキャンオン

モダニズムと理論の関係を、どう見直すか。モダニズム研究の空間論的転回は、こうした問いとも大いに関わってくる。モダニズム、あるいはいわゆる「ハイ・モダニズム」は、理論の下地を築いた思想だとされる(Ross 117)。確かにバフチン、ベンヤミン、レヴィナス、アドルノらモダニストなくては、新批評、脱構築、カルチュラル・スタディーズといった現代批評の方法論は誕生しなかっただろう。しかし、ヨーロッパのハイ・モダニズムの思想が理論の基盤であるとすれば——いや、本特集収録の大田信良の論文が指摘するように、ハイ・モダニズム自体、第二次世界大戦後の政治状況を背景に制度化されたのであれば、むしろ理論こそがハイ・モダニズムを成立させたのかもしれないのだが——いずれにせよ、全世界に散らばるさまざまな近代を記述し説明し尽くす理論を想定することは、新たなヨーロッパ中心主義、キャンオン(正典)中心主義に陥ることなくして、はたして可能か。

近年、歴史主義やカルチュラル・スタディーズの隆盛によって、従来のキャンオンに属さないモダニズム、「ポップ・モダニズム」や「バッド・モダニズム」といった文化現象が注目され(Suarez, Mao)、『ハイ・モダニズムの思想が正面切って議論されることは少なくなかった。ウルフ、ジョイス、T・S・エリオットらがいまだモダニズム研究の中軸にあることは間違いない

いとしても、こうした作家が論じられるのは、同時代のマス・カルチャー的現象との連関においてであることが多い。このような研究手法がとすれば、歴史実証主義の制度的硬直、安易な歴史反映論やポピュリズムに陥りがちだという批判は妥当である(遠藤、vi)。今日のモダニズム研究に求められているのは、ハイ・モダニズムを「エリート主義」として断罪することではもはやなく(あるいはハイ・モダニズムのマス・カルチャーへのコミットメントを無邪気に称揚するのでもなく)、より複合的な視点によるハイ・モダニズムとロー・モダニズムの関係の精緻な見直しなのではないか。たとえばアンドレアス・フイセンは、『モダニズムの地理学』所収の論文「グローバル化しつつある世界におけるモダニズムの地理学」の中で以下のように述べている。非西洋地域においてはしばしば、二つのモダニズムの関係は西洋におけるそれとはずいぶん異なっている。そこでは西洋のハイ・カルチャーがローカルな伝統文化との関係で必ずしもハイブラウの地位を獲得するわけでないし、マス・カルチャーにたいする抵抗は、それが低級な娯楽だからではなく、むしろ西洋の文化的覇権を象徴するものだからである。フイセンによれば「エリート文化を首尾よく攻撃することが、政治的、社会的変革に主要な役割を果たすと考えるのはやめるべき」である。非西洋のモダニズムに目を向けるならば、文化の実践やその生産物がそれぞれの地域の政治的、社会的言説とどのように結びついているかを詳細に検討する必要がある(Huyssen 14-15)。

本特集に収録された論文はいずれもモダニズムとキャンノンの関係を再考する上で非常に示唆に富むものであるが、中でもデ INA・アル・カーシムの「見捨てられた言葉」は、C・L・R・ジェイムズの獄中体験記という、キャンノン作家の非キャンノンのテクストを意図的に取り上げてある点で、私にとっては興味深い。入国管理法違反の罪でエリス島に収容されたジェイムズの言葉は、その舌鋒の宛て先であるアメリカ市民には完全に理解されることのない見捨てられた言葉である。そうした言葉はここでは「罵り (rant)」と呼ばれているが、この罵りというジャンルならざるジャンルこそが、モダニスト・ディスコースの一つのモデルとなるのである。アル・カーシムの議論は、モダニズムの空間的、時間的拡大が単なる文化相対主義に陥らないための非常に有効な方法論を提示している。それはおそらく、規範的でないもの、見捨てられたもののポジションからふたたび理論を構築し、普遍性へと到達する可能性を思考する試みである。モダニズム／モダニティの時空間に思いを馳せるとき、私自身の意識下に常にあるのも、そうしたアクロバティックな普遍への夢である。



引用文献

Appadurai, Arjun. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1996.

Brooker, Peter, Thacker, Andrew eds. *Geographies of Modernism: Literatures, Cultures, Spaces*. London: Routledge, 2005.

Friedman, Susan Stanford. "Periodizing Modernism: Postcolonial Modernities and the Space/Time Borders of Modernist Studies." *Modernism/Modernity* 13: 3 (2005) 425-443.

Loomba, Anita et al. eds. *Postcolonial Studies and Beyond*. Durham, N.C.: Duke University Press, 2005.

Mao, Douglas, Walkowitz, R. L. eds. *Bad Modernisms*. Durham, N. C.:

Duke University Press, 2006.

Steven Ross ed. *Modernism and Theory: A Critical Debate*. London: Routledge, 2009.

Suarez Juan A. *Pop Modernism: Noise and the Reinvention of the Everyday*. Urbana: University of Illinois Press, 2007.

遠藤不比人他編『転回するキヤン——イギリス戦間期の文化と文学』研究社、二〇〇八年。

スビヴァック、C・G『スビヴァック、日本で語る』橋銅哲監修、みすず書房、二〇〇九年。

